



矢島 渚男 選

稲妻の注ぐ庄内平野かな

寒河江市 大谷 正行

【評】山形県の庄内平野は古くは「好色一代男」、近くは時代小説の「海坂藩」の舞台としても知られ、豊かな土地へ注ぐ稲妻だから、広がりがあり、切れ字が決まっている。
富士山の赤石塚に夏終る

神戸市 吉野 勝子

【評】今年富士山へ登った記念に拾ってきた石ころだろう。私も若いころのお土産は石ころだった。中には随分重たい石ころもあって、本棚に鎮座している。
昼八つの佃煮稲子黒光り

郡山市 寺田 秀雄

【評】おやつに稲子の佃煮で、きつと獲りたて。私の信州でも昆虫食の王者で栄養的にも酒の摘みにもいい。行く秋や寄書き残る無人駅

会津若松市 星 静子

奥琵琶をめぐりて去りぬ雁の陣
綺羅飾る矢島練子や秋祭

東京都 腰山 正久

盛装の嬰兒軽し秋つらら
黄ばみ始めて豊作と知る檸檬

京都市 根来美知代

ミシン踏み夜業の手元灯りかな
ひたかな市 鈴木 敏男

神奈川県 石原美枝子

高野ムツオ 選

向日葵の国は瓦礫の国となり

茨城県 星野 芳美

【評】まずはウクライナと結びつけず鑑賞したい。一面の向日葵畑。台風などの災害で一気に瓦礫だらけになった。倒れた向日葵も見えろ。その上でウクライナの人々を想像したい。
ガソリンのぬらりとにほふ残暑かな

加古川市 石村 まい

【評】立秋以後が残暑だが、とても残暑と呼ぶような暑さではなかった。洩れたガソリンの匂いが暑さを倍增。「ぬらり」の触感がリアル。
賢治の忌銀河鉄道はほ走る

小田原市 北見 鳩彦

【評】賢治と銀河鉄道の取り合わせは安易に見えそうだが、「なほ走る」に実感がある。賢治の理想が今も求め続けられているからだ。
燐寸擦る音に深まる夜霧かな

神戸市 山口 誠

鯖雲や妻にならひてB定食
潮騒に負けぬ多なり虫しぐれ

倉敷市 谷吉 修一

空気入れ油も差して九月に入る
秋つらら隅の隅まで玻璃戸拭く

南房総市 山根 徳一

眠りつくまでが一日蚯蚓鳴く
齧るやに青春あふる林檎の香

川越市 大野有之介

大和市 おおもりじゅん子

正木ゆう子 選

農継ぐも案山子と語る暇は無し

山形市 栗原ただし

【評】いかにも穏やかな案山子の立つ風景。しかし現実にはけっこう大変で忙しいのだ。それでも、案山子と話す暇は無いという表現からは、たっぷりとした心の余裕が感じられる。
林檎まだ木にあつて手はつないでる

館林市 松本みゆき

【評】私たちの手に届く林檎はバラバラ。でも木にある時は手をつないでいる、という発想に夢がある。みんな一緒に咲き、一緒に実ったのだ。
初恋や光と陰で描く林檎

武蔵村山市 井上香津子

【評】よつするに、輪郭が無い、というところだろう。実際には何も起こらなかった恋。淡い思いの光と陰だけで、画布に浮かび上がる林檎。
きみなくて秒針刻む夜長かな

横須賀市 平野 雅夫

来年も来ますとバイト牧終ひ
洋棉と和棉の違い聞きて摘む

栃木県 あらみひとし

越してきし近所に五ヶ所葡萄園
休職を決める柘榴の裂け具合

宝塚市 広田 祝世

溝蕎麦の蔓延る下を水ながれ
玄関と南窓開け秋の風

志木市 谷村 康志

丸亀市 市橋 康子

小澤 實 選

虚子申す時解決す残暑また

つば市 村越 陽一

【評】「時ものを解決するや春を待つ 虚子」の本歌取りをしている。あれほどまでに我々を悩ましつづけた残暑もまた、過ぎゆく時間が解決してくれた、というのである。
夜長なり八十路の視力1.5

狭山市 富沢 証江

【評】作者は白内障の手術の結果、好視力を得たとのこと。この視力で読売俳壇を味読してくださっているようだ。季語、夜長がよく効く。
うつろう母播るところうつろう

大阪市 今井 文雄

【評】秋になって、自然薯がおいしくなると、大きなすり鉢を出して、母がとろろを搗ってくれた。「ごうごう」の繰り返しも懐かしい。
秋暑しぐれと引つ張る大の紐

東京都 杉中 元敏

島の子は潮風に稲架立てつらぬ
集合写真センターに受賞菊

津市 中山 道春

立てるまま流るる樹木秋出水
芋虫のわつせわつせと地べた這ふ

東海市 斉藤 浩美

老犬の吠えたてておりん惑
広辞苑を亜鈴代はりや生身魂

東京都 望月 清彦

八王子市 間瀬 昭次

俳句あれこれ

堀本裕樹 (俳人)

恩師の音色

今年五月三十日、宗教哲学者の鎌田東二先生が逝去された。僕の大学時代の恩師であり、俳句の道へと導いてくれた方でもある。初学の僕に「俳句は宇宙を詠めるんだ」と、十七音の無限の可能性を指し示してくれた。大学生の時、俳句合宿で秩父にある横尾龍彦氏のアトリエに先生を訪ねたことが印象深い。当時の先生は酒豪で俳句合宿と称しながら、ほぼ飲み会であった。深夜酔っぱらった先生は中島みゆきの「最後の女神」を大音量で流し、ロボットダンスを踊っていた。面白い先生だなあと僕は好奇の目で見つめた。朝目覚めると、また音楽が鳴っている。アトリエの一階で大の字に寝ころんだ先生は目を瞑り、グレゴリオ聖歌を聴いていた。中島みゆきからグレゴリオ聖歌への振幅がそのまま、先生の懐の深さであり魅力だった。先生はよく法螺貝を吹いた。その音色が恋しい。△虫の闇より幽かなる法螺の音や 裕樹



題字デザイン・イラスト

福田美蘭